

伝説になる骸骨と伝説
になるかもしないハ
ゲ

蓮太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オバ口とワンパンマンのクロスがないなと思つて突発的に書きました。モモンガさ
んの頭とサイタマの頭つて似てるよね（暴論）

目 次

骸骨とハゲ、出会い

1

骸骨とハゲ、力の一端を見る

9

ハゲの一日・カルネ村復興・前編

20

骸骨とハゲ、出会い

カルネという村にサイタマという青年がいた。

彼には親はない、というのも彼が赤子の頃、カルネ村に死に体でたどり着いた女性が息を引き取る前に託した赤子が彼であり、幸いにも村の人たちが善人であつたために引き取られて暮らしていた。

知識こそあまりないが、成長するにつれて村の働き手としてそれなりに頼られるようになっていた。

だが、何故サイタマが王国が帝国との戦争中に徵兵されていないかといふと、彼がカルネ村を拠点とする冒険者であるから、ということになつてゐるからだ。

いつだつたかサイタマにエ・ランテルにお使いを頼んだ際に本来なら二日かかるところを日帰りで帰ってきたことから始まる。

彼は貴重な村の若い男の働き手として一応残しておきたかった誰かが「こんなに早く帰つてこられるなら運び屋として登録しておけばいいんじゃないか」と言つたことで成り行きで登録していた。

その後は村で働きつつ冒険者として運び屋の役割を果たしていくつも日帰りで帰つて

きていた。

後ついでに腕立てと腹筋、ランニングを日課として行っていた。

村人は知らなかつた、運び屋としての道中でモンスターと戦闘をして何度も死にそうになつていたのをはつたりやお小遣い程度の金で買った安物のポーションだけで済ませていたことを。

日課のランニングは魔物だけのトブの大森林で行つていたことを。

いつの間にか身の丈を超えた戦闘を、特訓を死に物狂いで繰り返していたサイタマはいつしか……

強くなりすぎた

O
V
E
R

L
O
R
D

×

O
N
E

P
U
N
C
H

M
A
N

モモンガはがつかりしていた。

かつて『ユグドラシル』というDMMO—RPGにて悪名を轟かせていたがサービスが終了してしまい、最後までログアウトせずに残っていたら異世界転移してしまった。色々あつてこの世界で二度目の外出でとある村の襲撃をみてしまい、かつての仲間の言葉を思い出して村の襲撃者を撃退しようと行動に移した。

しかし、その襲撃者はモモンガの想定よりもはるかに弱く、レベルが100でカансストしているモモンガに対し襲撃者の兵士のレベルは1桁しかない。

ついデスナイトを解き放つてしまつたが、いくら何でも過剰だつたのではと思つていた。

「お姉ちゃん、だいじょうぶ?」

「う、うん。この方がくれたポーションで治つたから」

そしてここにいる姉妹は村の襲撃者から逃げてきてモモンガに助けてもらつたとい

う経緯がある。

この姉妹は戦闘なんて一度も関わったことがないから兵士から逃げることしかできないのも当然だつた。

「こんな時にサイタマがいたら…………」

恐らく村の中で一番戦えるはずの青年の名を口にした。

「ふむ、サイタマという者がいればなんとかなつたのか」

「たぶん…………でも今日は用事があつたからいなくて…………」

ふむ、とモモンガは思考する。

「（サイタマ、という人は多分村の中で最強つて感じの人だろう。しかし、タイミングが悪かつたとしかいいようがないなあ）」

さつきの兵士が1桁台のレベルならサイタマという人は二桁ちょっとあるくらいじゃないかな、と考えていた間に従者としてついてきた鎧姿のアルベドが物凄いオーラを出していることは怖くてスルーした。

デスナイトが襲撃者を全員殺してしまうのではないかということに気づいたモモンガは慌てて様子を見に行くが、最後に残つた襲撃者はデスナイトに切り捨てられてしまつた。

あちやく、と思いつつも仮面の下で表情が見えない（表情と言つても骸骨なので普通

は分からぬ）ため声だけ平静を装い生き残つた村人と話し始める。

ここでAINZ・ウール・ゴウンと名乗つた事や村の復興に協力するなどの取り決めを交渉していた時に事件は起こつた。

バゴンツ！

「なんだ今の音は？」

「もしや、また襲撃者がやつてきたのかもしません」

悪夢の再来かと考えた村長だったがモモンガ改めAINZにはデスナイトがやつたものだと思つた。

しかし現実は逆だつた。デスナイトの気配が消えたことから外部からやつてきた者がデスナイトを一撃で仕留めたのだと確信した。

「村長はここで待つていてください。アルベド、一緒に来い！」

「はい、モモンガ様」

もしかしたらこの地域だけが特別に弱かつたのかもしれない、それとも規格外が訪れたのかもしれないと警戒心MAXで出迎える。

もしかしたら我々の知らない魔法があるのかもしれない。未知のマジックアイテム

があるのかもしれないと内心期待もあつてきたのはいいものの。

「えーっと…………この持ち主、でいいんだよな？」

そこにいたのは遊んでたら窓ガラスを割つてしまつたかのような間抜け面のハゲだつた。

「ち、ちがうんです！ サイタマはさつき帰つてきたばかりで事情を知らないんです！」
「ごめんなさい！ 何でもしますから命だけは…………」

「…………、この下等種族が」

デスナイトの残骸らしいものとその周囲に村人がたかつていたが、アインズの姿を見ると顔を真つ青にして弁明してきた。

ここまで過剰反応するのかとアインズはのんきに考えていたが、隣のアルベドが鎧越しなのにイラついてブチぎれる寸前だつたことを察しとつさに止める。

村人の反応、デスナイトを倒せるほどの強さを考えて一つの答えを出した。

「なるほど、君がサイタマだな」

「ああ、そうだけどあんたは？」

「私はアインズ・ウール・ゴウン。このデスナイトは私が創つたものだつたが、いつたいどう倒した？」

「あー、なんか村にヤバ そうなのがいたから殴つた」

「な、殴った?」

デスナイトは本来ならタンクとして即死ダメージを受けても一度だけ耐えきるという特性があるアンデットなのだが、一撃で上半身を粉碎し戦闘不能にすることは不可能である。

しかし、現状の証拠として上半身のないデスナイトと無傷のサイタマがいる。
「なあ、サイタマ君」

故に興味を持った。そこらにいる人間なら興味を持たなかつただろうが、ここはアンズの認識が正しければ異世界であるため何かしら得られるものがあると考えた。

それは、愛する家族を守るために、いつか帰つてくるかもしれない友を待つためか。
「少し、私と話をしないか?」

「ああ、別にいいぞ」

ここに不死の王と知られる骸骨と後に趣味でヒーローをやる男が邂逅した。
この二人が後の歴史にどう影響するのか、それはまだ分からぬ。

骸骨とハゲ、力の一端を見る

「へー、よく分らんがとにかくすごい魔法詠唱者なんだな」

「ふむ、モンスターを積極的に倒すのではなく鍛えて強くなるか……なるほど、基礎能力の向上か？いやはや興味が尽きんな」

偉大なる死の支配者アインズとそこら辺にいそうなハゲ。サイタマの話し合いは非常に短く終わつた。

なにせサイタマは辺境に住む村人と同じ知識量しかないためアインズの魔法詠唱者としての偉大きさが分からず、サイタマからはあまりにも単純すぎる筋トレ程度しかなかつた。

当然、話を切り上げるほかなかつた。

ちなみにアインズの偉大きさを話す際は隣に従者として立つっていた鎧姿のアルベド（一応アインズがサイタマに名前を教えた）が物凄い剣幕で語つていた。

しかしサイタマにとつてはユグドラシルの話ばかりで知らない世界のことなので何一つ理解できていなかつた。

サイタマの表情からつまらんということを察したアインズが話を切り上げなければ

もつと続いだらう。

実際、お互いの底知れぬ強さはどちらも見抜くことはなかつた。

そのころ、ガゼフ・ストロノーフが襲撃者がいたはずの村を転々とし、カルネ村に到着した。

ガゼフはカルネ村が無傷ではないが全滅していないことに違和感を感じたが、村人の話でデスナイトを従える魔法詠唱者マジックキャスターがたまたま来訪したということで納得した。

ここ最近では帝国との戦争で若い男が徵兵されているため全滅は覚悟していたが、生き残りがいるということで安心した。

そして、村人らを生き残された魔法詠唱者マジックキャスターは彼の来訪を持つて姿を現す。

「どうも、私がアインズ・ウール・ゴウンだ」

「私はガゼフ・ストロノーフ。村を救つていただき感謝する」

「いえいえ、全て事の成り行きですよ」

少ない会話ではあるがガゼフの礼儀正しさに交換を覚える一方、ガゼフのレベルは30程度と王国最強格と聞いていたアインズはまた少しがつかりしていた。

ふと、その時にサイタマのステータスをのぞき見していなかつたことを思い出したが、この後に起くるイベントの方が先決と考え、その思考は一度置いておく。
「ふむ、確かに帝国が露骨に証拠を残すはずがない。となるとやはり法国……」

「間違いなく私を始末したいのだろう。済まない、このようなことに巻き込んでしまつて」

「まさかとは思いますが、このまま放置するおつもりで？」

「…………これは我々王国の問題だ。申し訳ないが決着は我々でつけさせてもらう」物語に出てくるような武人にアインズは心打たれた。そして彼が間違いなく負けるであろう戦場に向かおうとすることも即座に理解した。

だから少し手助けをしたいと、考えていた時だつた。

「すいませんアインズ様！サイタマを見かけませんでしたか？」

「む？」

「サイタマ、というのはこここの村人か？」

「はい、襲われた後に帰つてきたばっかりだつたんですけど見当たらなくて」

言われてみればアインズが外に出てきてから一回も目立つ禿げ頭を見かけていない。

あの毛髪が一本もない頭は訓練の賜物と言つていたが、実際にああなるのはスキルか何かの反動ではないのかと訝しんだのはご愛嬌というものだ。

しかしサイタマが見当たらぬとなつたら一体どこに行つたのか。

こつそり使い魔を召喚し偵察に出したアインズは、興味深いものを見た。

12 骸骨とハゲ、力の一端を見る

「おい、お前らが村を襲つた奴の仲間か？」

ニグンは困惑した。陽光聖典としてガゼフ暗殺の指名を受けており、ガゼフをおびき出すことに成功した矢先に冒険者らしい青年に見つかってしまった。

様々な村を襲撃して時間はそこまで経つてないが、もしかしたら襲つた村が故郷でちょうど帰ってきたばかりの不幸な冒険者だつたのかも知れない。

『不幸なことに』、目撃者が居ては今回の作戦は失敗となる。そのため目の前に立つ冒険者を……。

目の前の青年は皮鎧どころか布の服で腰に剣すら刺していない、どう見てもそちら辺にいそうな村人ハゲに見えてきた。

「だとしたらどうした。今からお前はここで死ぬのだ」

「話きかねー奴らだな。なんでやつたかどうか聞いてんのに殺す選択肢が出てくるんだよ」

「説明せねばわからんとは、無理もないか」

やれと言わんばかりに部下に視線だけで合図を送る。

意図を汲んだ部下が剣を抜きサイタマを切り捨てんと襲い掛かってくる。

見た目通り弱そうであれば剣を一度振るうだけで終わるはずだった、少なくともこの場にいる陽光聖典のメンバーは。

バゴンツ！

その考えはサイタマに通用しない。

「…………は？」

たつた一回、拳を振るつただけで剣を振つたはずの者がニグンらよりもはるか後まで飛んで行つた。

振り返つて倒れた者を見てもピクリとも動かない。

「お前ら…………覚悟できてるんだろうな」

静かな怒りというのはこういうことを指すのだろう。表情はなく、声に抑揚もない、しかし声にはドスが効いていて不気味さを醸し出している。

サイタマは敵対する者に対して容赦はなかつた。今まで魔物だけではなく盗賊など誰にも知られない悪党に分類する類の人種を一撃で叩きのめしたことだつてあつた。

それ以前に、今まで育ててくれた親代わりの近隣住民を殺されて怒らないなどもつてのほかだつた。

「うつ、ぜ、全員構えろ！詠唱の準備だ！」

ニグンの号令で我に返つた者たちが魔法を発動するための詠唱を唱えようとする。

もしかしたら目の前にいる男は怪物なのかもしれないという恐怖を頭の片隅に背負い、詠唱してもその恐怖が晴れることはなかつた。

最も、その祈りが届く前に意識が飛んで行つたことに気づくことすらできなかつた。

「う、うわあああ！」

「なんだこいつ、はや、あべつ!?」

「一体我々は、何を敵に回したのだ?」

ガゼフを抹殺するために集まつた精銳たちが拳一つで蹂躪されていく。

まるでドラゴンに出会つてしまつたような、運命であるかの如く一撃で葬られていく。

「くつ、こうなればアレを使うしかない！皆、時間を稼げ！」

もはや全員が決死の勢いでニグンが持つ魔封じの水晶に賭けるしかなかつた。

サイタマの強さは彼らが知る中で最上位に位置するモノと確信した。

ならばかつて魔神を葬つた天使を召喚するほかない。ニグンはそう確信して、部下を

捨て駒同然として召喚の準備を行う。

部下は魔法にて天使を呼び出しサイタマに対抗しようとした。

だが第三位階魔法で召喚した天使如きでは快進撃は止められることはできない、しかし注意を逸らし時間稼ぎはできた。

「見るがいい、最高天使の尊き姿を！」

水晶が碎けて神々しい光と共に威光の天使が降臨する。

あたり一面を天使が発する光で照らし、文字通り現地では神の使者と言わんばかりの威光を放っていた。

「ふ、ふはははは！この最高位天使さえいれば貴様如きー」

「うお、まぶしつ」

その一言のうちに目に止まらぬ速さで前方に跳躍し拳を前に出した、それだけの動作を一瞬で行なつた。

ドミニオン・オーソリティ
威光の天使だつた。

それだけのはずなのに、振り向いたニグンの目に映つたのは半身が吹き飛んだ様が天使が敗れたという証明になつていた。

「ば、馬鹿な…………こんなことが…………」

魔とはいえ神とついたものを倒した天使を瞬殺したという事実を受け入れられず膝をついてしまう。

切り札を失つた隊長が折れてしまつたとなれば部下も心折れるというもの。

逃げ出すものもいれば全て諦めて同じように膝をつく者もいた。

だがサイタマは許さない。倒すことを諦めてしまつたニグンに近づいていく。

「ひつ？た、頼む！金なら幾らでも渡す！だから」

「うるせえ、そんなことより死んだ奴らに詫びろ！」

ゴツ、という殴られた音が聞こえる前にニグンの意識は途切れた。

「ほう…………やはりというか、サイタマ君は『特別』らしい」

村人総出、とは行かなかつたものの少なくはない人数をサイタマ搜索に当てる中、
AINZはポツリと呟いた。

「皆さん、私の使い魔で様子を見たのですがサイタマ君は無事です」

とはいへ、このままだと話が進まないためサイタマを見つけたことを報告する。

「ああ、問題はありませんよ。戦士長殿、どうやら全て終わつたようです」

「なんだつて、いや、それは…………」

「あの方角にサイタマ君が気絶させた者どもがいます。手間が省けましたね」

ざわつく戦士達をよそにAINZは思考する。

「（うつわ何あれワンパンつて！いやあれくらいの召喚天使ならどうとでも出来るけど
この世界の人たちつてレベルが極端なのか？通常攻撃であれくらいの威力出るなら
シャルティア辺りとか対等…………いやデスナイトをワンパンで倒してるから別の力
が働いてる？それが一撃必殺のスキルみたいな、いやでもあそこで殴られた人全員生き
てるっぽいしなあ、というかあれ生きてる？）

サイタマが殴った者達はピクリとも動かないが最低限の呼吸はしているようなので
生きてるはず。

逃げた者らは既に包囲していた八肢刀の暗殺蟲によつて捕獲、実験材料にする事を決
定した。

エイドエッジアサシン

「（推測ではあるが個体差が激しい？うーむ、捕らえた人間で試すべきだな。となると、この世界にはサイタマのような人間がいるかもしれない、警戒しないと）」
誰にも気付かないうちにアインズの警戒度は大きく跳ね上がった。

ハゲの一日・カルネ村復興・前編

「サイタマ、起きなさい！もう朝よ！」

カルネ村にいるサイタマの一日は早い、というのも普段は特にやることもないため村の手伝いをやっていることが多い。

そのため、遅ければ昼くらいまで寝ているサイタマを叩き起こしに来るので。特に、襲撃があつたせいで死体の処理や壊された家の修復、また外敵が来る可能性があるせいで柵を立てることになったたた。

何せ人手が減ったのだ、サイタマが手伝わなければ何言われるかもわからない。

サイタマの主な仕事は近くの木を伐採し、物資を運ぶこと。

伐採に関しては木を殴って折るとかいう豪快な方法を用いているが、細かいことは苦手な傾向にあるため共同作業になる。

もちろん、柵を作る方を任せるのだが、柵を地面にさすのはサイタマの仕事である。

「いやー、サイタマがこの時期にいてくれて助かつた。ネムにこんな作業やらせるわけにはいかないからな！」

「こんなつて言うなよ。俺だつて帰るところがなくなつたら困るからな」

「くうく、非常時には役に立つなあ～」

「いつもは役に立つてないみたいに言うなおい」

軽口を叩きあいながらも作業は進めていく。

時折、丸太を肩に複数抱えたまま日課の筋トレの一つであるスクワットを休憩時間の合間に使う、暇な時間はカルネ村にいる限り余りないのだ。

カルネ村の人たちからすれば日常風景なのだが、外から来た人が見れば異常だと思うだろう。

なにせサイタマが抱えている丸太は根元から叩き負った未加工のものを繩でまとめた6本分、それを背負つてないかの如く軽々とスクワットを行っているのだ。

それでもサイタマにはただの筋トレでしかないのだ。どう見ても荒行の一つにしか見えないが、これが普通なのである。

「あー、木材ならアレつかえばいいんじやね？」

「馬鹿野郎お前、アレなんて誰も加工できやしねえじやねえか！そもそも倉庫番やつてあるあれを使える奴なんていないだろ…………」

『アレ』とはかつてサイタマが大量にとつてきたのはいいものの、カルネ村にいる人間どころか工・ランテルに運んでも誰も加工することができなかつた謎の木材である。

サイタマに聞いても「襲ってきたから殴り倒した、その時の戦利品」というだけでト

レントか何かと思われる。

売るにも物が物だけに中々売れず、結局倉庫番もしくは元あつた場所に放置してきたものだ。

そんなものを使つたとしても縄で結んだ見た目も悪く質の低い柵しかできない、しかし今は頼れる魔法詠唱者マジックキヤスターがいるではないか。

「アインズなら何とかしてくれるかもな」

「アインズ様かあ？ まあ確かにあの方ならなんとかできるかもしけんが、というか様をつける様を。あの方は村を救つてくださった人なんだぞ」

「あー、がんばる」

ここにシモベが居たら激怒していたことだろう。実際、サイタマの近くに潜ませている影の悪魔シャドウデーモンは使命を忘れない程度にキレている。

もし『アレ』を加工できるなら持つていく価値はあるかもしれない。念のため、少しでも多く持つていこうと

再び『アレ』の採取にサイタマは向かう。

時間は昼過ぎ、食事をとつたサイタマは森の中を走つて進んでいく。

森というのはもちろんトブ大森林のことである。ここをランニングコースとしているサイタマは特に苦も無くとてつもない速度で走り抜けていく。

今日はやけに動物の視線が多いなと思いつつ、ずんずんと進んでいく。

ここでトブの大森林は普通の人間ならある程度のところまでなら安全ではあるが、一定を超えると鬱蒼とした不気味なものと化し、いつモンスターが襲い掛かってくるか分からないも程になっている。

冒険者とは言えど、依頼でもなければ近寄りもしない場所を走り込みに使うというのは狂気じみているとしか言いようがない。

「そろそろあそこにつくはずだよな…………お、ここだつたな」

深い深い森を抜けるとそこは一つの荒れ地があつた。

ただの荒れ地ではなく、中心には全長50mはあると思われる大きな木がぽつんと一本だけ立っている。

その周りには木や草が一本もなく、まるで養分が全て大きな木に吸われてしまつたと言つて過言ではない状況。

よく見ると大きな木は血管のように脈打つ部分があり、サイタマが近づくほどその鼓動は大きくなつていった。

「オ…………オオオオオオオオオオオオ!!!!?」

ある時は破滅の竜王と呼ばれ、またある者はこれをザイトルクワエと名付けた世界を滅ぼしかけない魔樹。

存在するだけで世界を滅ぼしかねない厄災が今ここに目覚めた。

「よし、久しぶりにやるか」

まるでたまに来てはぶつ倒しているかのように、英雄は言う。

で追い払おうと必死の抵抗を繰り出す。

い。だが、その触手はサイタマに軽く払われただけで爆散していき足止めにすらならな

「ノオオオオオオオオオオ!!! グルナアアアアアアアア」
「相変わらずうるさいなお前」

びゅんつ！

バツキヤアア！

たつを一回だけ、ちようど金長のど真ん中に挑戦して拳を張る。

ザイトルクワ工は殴られた衝撃に耐えられず、殴られた個所から真っ二つに折れた。

本体の半分がぶつ飛ばされ生命力を失っていく様が遠めから見てもわかる。

後に、監視していた影の悪魔からアインズに伝わった時に「何やつてんだこいつ!？」と
言わることになる。

ザイトルクワエはAINZが知る世界から見ると『レイドボス』と言われるモンスターに値するもので非常に多い体力を持つことから協力者が必要と言われるほどの者だつた（AINZだと一人でも倒せるが）。

ちなみに、本来のザイトルクワエの大きさなら100mを超える超巨大樹なのだがサイタマに何度も折られ続いている。

しかし、ザイトルクワ工は瀕死の状態になつた後に倒したと思つたサイタマが放置するためギリギリのラインで生き残つてゐるのだ。

そのため何度も復活するものの周りに十分な栄養分になる木や生物がいないため

徐々に小さくなっている、例えるならレイドボスを倒せなくて時眼切れになつたら体力がある程度回復して復活して再登場する方式である。

これを無自覚にやられてしまつてゐるためザイトルクワエはサイタマのことを『自分を瀕死まで痛めつけてくるやべーやつ』と記録されてしまいサイタマが近づくだけで頑張つて目覚めて帰つてもらおうとするくらいなのだ。

「よーし、これくらいでいいよな。さて、帰るか」

柵の材料になりそうなザイトルクワエの木材をひとまとめにし、担いでそのまま直帰する。

ちなみに、トブの大森林は様々な要素が加わつてゐるせいで現地人では全貌を探索することはできない。

ザイトルクワエに最低限の監視をしていたがサイタマが易々と倒したことによつて状況は一変、法国でプレイヤーが降臨したのではないかと監視に注力することになった。

なお、肝心のハゲは森の中に入つた途端に見つかなくなる模様。

「これアインズが加工してくれつかな」

光が入りずらい森の中では目印は目立たないのでから。